



監獄
性

體驗版

性監 城獄

本作品の一部または全てを、複製、再頒布、アップロードすることは違法です。絶対におやめください。

著者の許諾なくアップロードした者は、閲覧数及び被ダウンロード数に応じて本著作の価格分を著者に支払うことに合意したものとします。

係争の移管先は東京地方裁判所とします。

つじもが町に殺ってきた

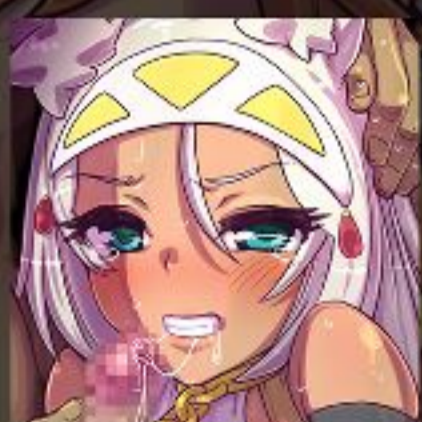
I N D E X

監獄性

序章 ～闇にうごめくもの～ 4 p



巫女ゼシア
5 p



シーリス
23 p



クラウ
38 p

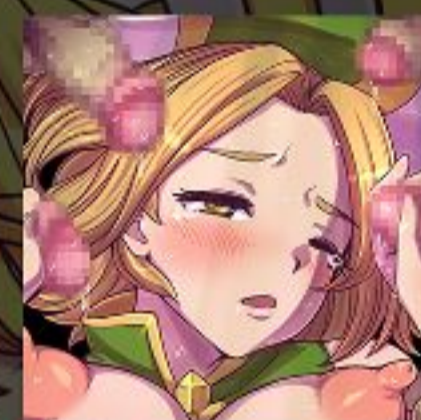
第1話 聖城陥落 62 p



メルサ
63 p



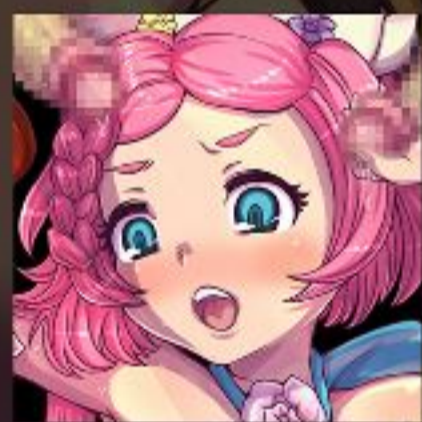
アオイ
69 p



ソフィ
75 p



リリィ
81 p

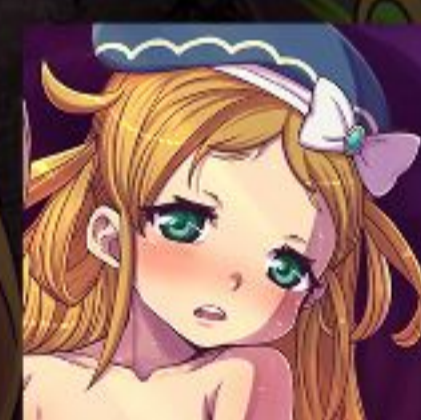


メリィベル
87 p



セリエラ
96 p

第2話 魔汁の宴 102 p



ピアチェ
103 p



アマネ
118 p



ジュリエッタ
124 p



イルテミア
142 p

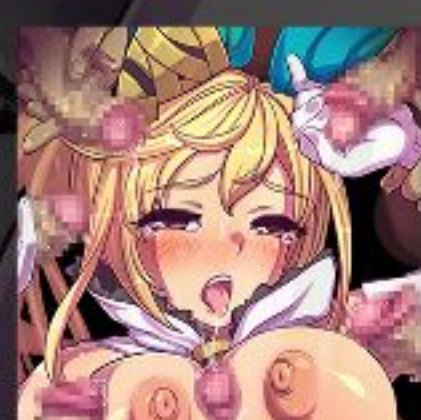


シノア
151 p

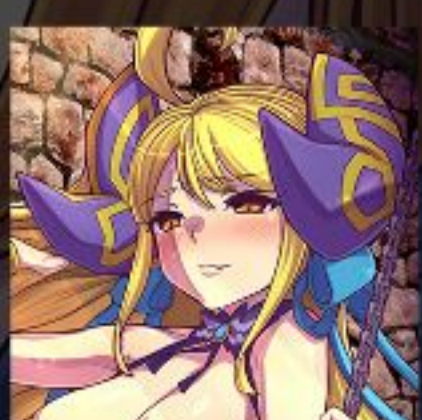


ルイーゼ
157 p

第3話 監獄性城 175 p



エルフィリス
176 p

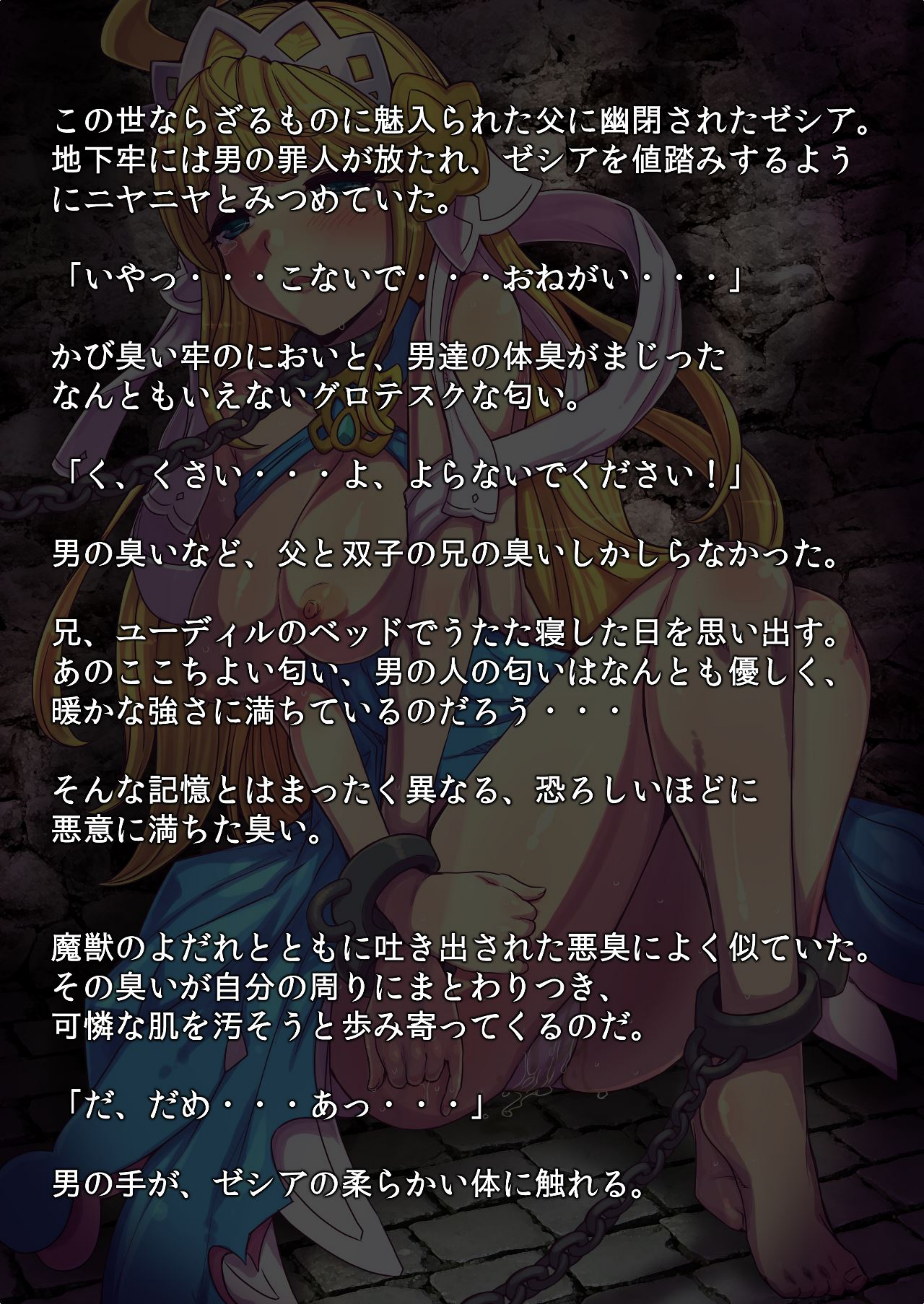


闇ゼシア
212 p

性監 城獄

序章 ~闇にうごめくもの~





この世ならざるものに魅入られた父に幽閉されたゼシア。
地下牢には男の罪人が放たれ、ゼシアを値踏みするようにニヤニヤとみつめていた。

「いやっ・・・こないで・・・おねがい・・・」

かび臭い牢のにおいと、男達の体臭がまじった
なんともいえないグロテスクな匂い。

「く、くさい・・・よ、よらないでください！」

男の臭いなど、父と双子の兄の臭いしかしらなかった。

兄、ユードイルのベッドでうたた寝した日を思い出す。
あのこちよいい匂い、男の人の匂いはなんとも優しく、
暖かな強さに満ちているのだろう・・・

そんな記憶とはまったく異なる、恐ろしいほどに
悪意に満ちた臭い。

魔獣のよだれとともに吐き出された悪臭によく似ていた。
その臭いが自分の周りにまとわりつき、
可憐な肌を汚そうと歩み寄ってくるのだ。

「だ、だめ・・・あっ・・・」

男の手が、ゼシアの柔らかい体に触れる。



うん...

うん...

うん...うん...

うん...

うん...うん...

うん...

うん...



「貴族の女だとはおもったが・・・おいおい、
巫女の姫さまじゃねえか」

「ククク、どんな悪さしたらこんなところにブチこま
れるんだあ？ おめえさん悪い子だなあ～？」

清めた身から香るほのかな女子の香りが、男達の鼻腔を
くすぐっていた。その香りは長期の禁断生活を強いられ
てきた男たちにとっては麻薬と同等の興奮をもたらす。

「はー はー はー フへへえ おんなのにおいだあ」

むくむくと股間から競りあがる肉棒。

幼きころ、大好きだった双子の兄と湯浴みをした時に
男子と女の子の体が違うということを初めて知る。

だが、彼らは恐ろしいほどに違う、凶暴で醜悪、
罪人の業を具現化したような悪意を見せ付ける勃起。

「へへへ、俺たちやあ明日にも打ち首を待つ身だあ
こんな据え膳食わねえ手はねえんだよ」

「姫さんよお・・・恨むんならこんなところに
ブチこんだヤツをうらみなよ？」

俺たちとは、なかよくしようや・・・ぐへへへへ」

「!!! やっ・・・!!!!」



ゼシアに人を恨むという感情は備わっていない。

それほどにやさしい心根の持ち主にとって、
罪人の悪意と猛り狂う男たちの性欲という感情は
正面から受け入れるには強すぎる感情だった。

「あっ・・・やっ・・・いやっ・・・」

胸を、足を、頬を、撫で回され、つままれ、にぎられ、
なめ回され、ねぶられ、あじわわされる・・・。

「はっ・・・ああ！ やっ・・・ひあっ」

自分の身に起きていることがどういう意味を持つのか
それすらもわからないまま、嫌悪と恐怖に包まれて、
ゼシアの心は萎縮していく。

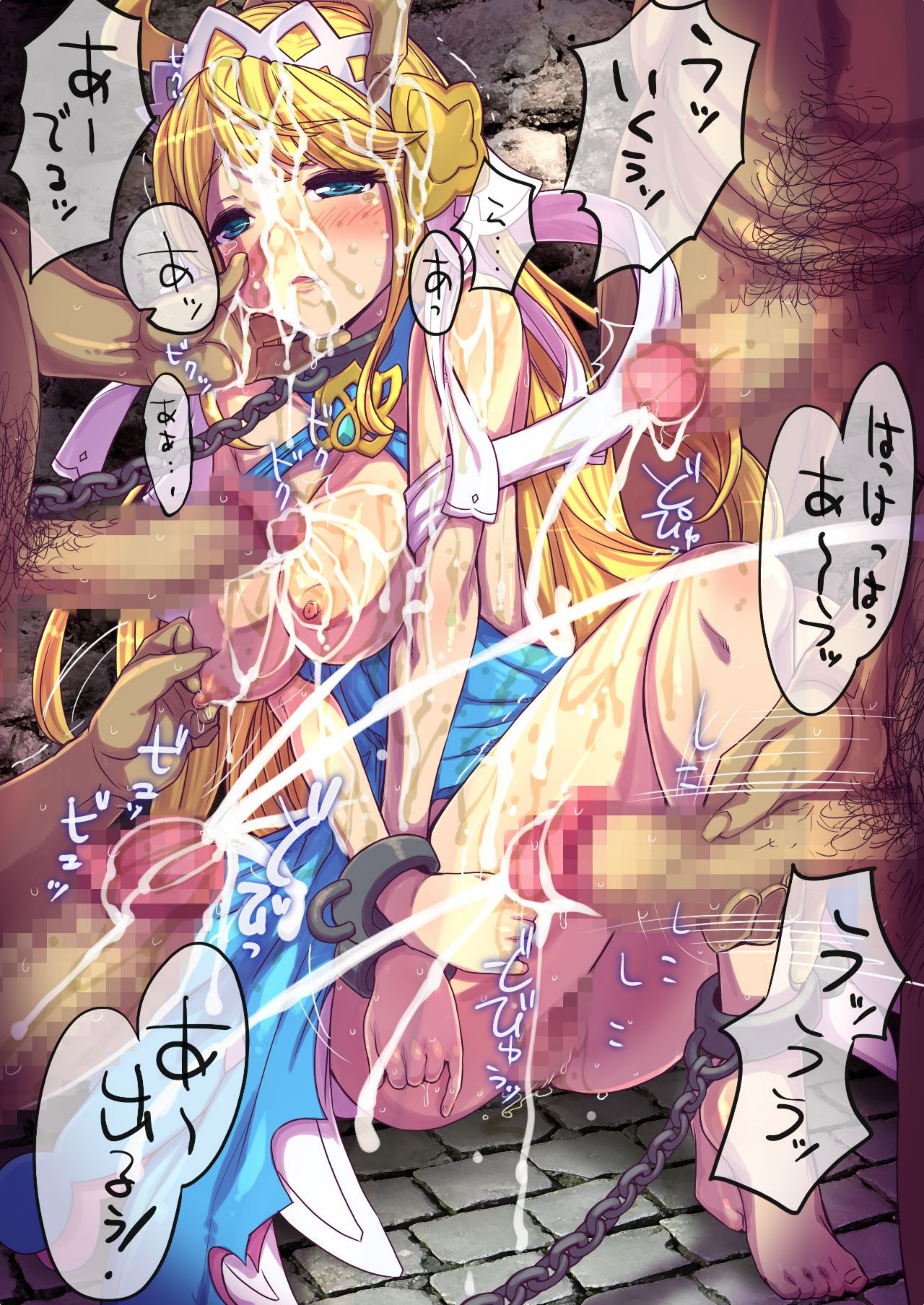
「いい子だあ・・・そうだよ、抵抗しないで・・・
全員でじっくり犯してやるからなあ・・・」

「はあっはあっはあっ あ～おれあもうでるう」

「こっちもだあ・・・たまんねえぜこの匂い！」

「ウヒヒヒ、この恐怖で固まっても可愛い顔に
ぶっかけてやるからなあ！ ウウウ！」

反り返った肉棒が、白濁した液体を吐き出す。
男達のうめきと恐ろしい悪臭、ゼシアはそれを受け止め
きれず、意識が遠くなっていくのだけを感じていた。



「さあ、さあ」

「さあ、さあ」

「さあ、さあ」

「さあ、さあ」

「さあ、さあ」

「さあ、さあ」

「さあ、さあ」

「さあ、さあ」

「さあ、さあ」



「・・・のだ・・・墮ちるのだ・・・巫女よ・・・
汚れを身にまとい・・・心を捨てよ・・・」

途切れ途切れの意識の中で、ゼシアは闇の中から声を聞いていた。

「そのカラダ、我に明け渡せ・・・」

「だ、だれ・・・？ え・・・ああ・・・！！！」

ふと意識が戻ると、冷たい石の床の上にそのカラダを横たえていた。が、熱い物が体の中から流れ出ているのを感じる。

自分の股間から、白濁とした液体があふれ出ている。それが男達の吐き出したおぞましい体液と知るのに時間はかからなかった。

「いやっ！ いやああ！ にいさまッ！ いやっ！ いやあ！」

罪人たちの精力が自分の中で満ちている。かわるがわるに犯され膣に放たれた精液が巫女の清らかさを消し、魔女としての力を強めている。

心がグズグズに壊れていく。
人格が恐怖と絶望で、湧き上がる闇の中へ沈んでいく。

失われそうな心の力と引き換えに、魔力だけが高まりあらぶるのを感じていた。



びしょびしょ...
びしょびしょ...

びしょびしょ...

びしょびしょ...

びしょびしょ...

びしょびしょ

びしょびしょ

+

+

+



「いやっ やめっ！ やめて！いけない！」

意識が途切れつつも男たちが犯す肉体への責め苦でふと自分を取り戻す。ゼシカはささやかな抵抗をと細くか弱い四肢をバタつかせる。

しかしその抵抗さえ男たちにとっては気持ちを高める性欲の餌にしかならなかった。

「お、意識がもどったみてえだぜ？」

「ぶっこわれた人形抱いてるみてえだったからなほら、抵抗してたのしませるよ！」

「あっ！あっ！ああ！だめ！やめ、やめて！でないと」

「そうだ！おらっおらっ！もっと抵抗しろッ！ウッ！」

ゼシアの本当の心は自身の肉体を攻められている事を止めてほしいわけではなかった。

意識を取り戻すたびに男たちは別者になっている。そしてゼシアの中には、まぐわった男達の生命の魔力が間違いなく宿っていた。

きっと、ゼシアの肉体は男達の精力を吸い取り、吸い取りきった末には絶命させるに違いない・・・

もはや肉体に満ちる魔力はゼシアの弱りきった意識でコントロール出来るものではなかった。



ちゅん

ちゅんちゅん

ちゅんちゅん

ちゅんちゅんちゅん

ちゅん

ちゅん

ちゅんちゅん

ちゅんちゅん

ちゅんちゅん

ちゅん

ちゅんちゅん

ちゅんちゅんちゅん

ちゅんちゅん

ちゅんちゅんちゅん



「私の体を欲していたのは・・・おまえ・・・ですね」

この世ならざるものがゼシアの心を
暗くドロついたヘドロのように覆い尽くしていく。

「フフ、まだお前の役目はこれからだ、叛徒の王子を
手中に収めるまで、しばらく眠っておれ・・・」

「あっ！ああ！あうううう！」

遠のく意識の中で、男達の絶頂を受け止める。
性のマナエネルギーが注がれる時に噴出す絶頂。
強制的に打ち込まれるパワーに体中が歓喜し、
ゼシアはガクガクを打ち震えている。

射精と共にすさまじい快感を帯び、昇天する男達の魂。

放たれたマナエネルギーを、巫女として鍛えられた器に
余すことなく啜り飲み込んでいく。

意識が遠のく。この世ならざるものに意識を犯され
性欲で満たされた儀式の記憶も消えていく。

冥府の暗闇は地の底から這い出し、
今まさに日の元へ蠢きだそうとしていた。

ゼシアの肉体という殻をまとめて・・・。



アハハハ

アハハハ

アハハハ

アハハハ

アハハハ

アハハハ

アハハハ

アハハハ

アハハハ

アハハハ

アハハハ

アハハハ

アハハハ

アハハハ

アハハハ

アハハハ

アハハハ

アハハハ

アハハハ



「はなせッ！ よるなあ！ うあああ！」

フォレスティアの村々がディアネル兵の軍隊によって次々に襲撃されていた。

急激な進行には大量の資源を伴う。
とくに兵を強靱化するため、マナの収集は最重要だった。

「こいつはイキがいいぜ
美人で強いフォレスティアがいるとは聞いていたが
これはとんだひろいものだな」

「犯しまくっていいんだよな？　ぐへへ
ゼシア様はサイコーだぜ」

屈強な男たちの腕がフォレスティアの娘、シーリスの服を引き裂き、押し倒す。性欲をぶつけられると観念したシーリスは、せめてもの反抗的な目つきで男たちをにらみつけた。

「おにいちゃんが助けに来てくれるんだから・・・
おまえたちなんて・・・みんな殺してやるからな！」

「威勢のいいことだな　その兄ってのはどこにいる？」

「そんなに強いやつなら、ほうっては置けないな
犯しまくったら、お前の兄とやらを狩るとするか」

「いやっ・・・あ・・・いや、いやあ！！！」



犯される・・・シーリスはその言葉を聞いてほっとした。今は命までとられることはない、機を見て逃げ出すチャンスはきつとある。

それはフォレスティア特有の思考でもあった。とくに耳長の種は、無理矢理な性交時、肉体が自身を防衛するために強制的に発情する性質が備わっていた。

「あっ・・・あ・・・ああ・・・んああ！」

「お、濡れてきたぞ・・・フフフ、じゃあ遠慮なく」

「お、おれ、もうでちゃう・・・」

「おら、こっちに顔むける、ウツ！」

経験のないシーリスにとって、ペニスから打ち出される大量の精液が何を意味するのかまったく分からなかった。

男たちがうめき、股間からせり出した肉棒から体液をびゅっびゅっと吐き出している。

ただ、それが快楽を伴うことだということははっきり分かった。種の性質が、望む望まないにかかわらず、自分の体を興奮させ、肉欲の蜜を股間からだらだらとたらし始めていたのだから。

「いやっ！いやあああ！ やめて、おねがい・・・
おかしく、なっちゃう・・・んくっ！」

「こいつ、かなりのマナもちだな、連れて行け」





村はずれの馬小屋で、より一層屈強な兵士に
犯され続けるシーリス。

とろとろになった肉体が男の乱暴な腰の動きに喜び、
ずんずんと激しく突き上げられるたびに、
湿った声と結合音を撒き散らしていた。

ずちゅん、ずちゅん、ずちゅん

「あっ！ あんっ！ あっ！ あっ！」

頭が真っ白になるほどの快感。

セックスがこんなに気持ちのいいものだったなんて。
殺意も憎悪も消えうせ、ひたすら快楽に酔いしれる。

「うううううう！でるっ！ウグウウ！」

男が何度も何度も膣の中に射精している。

「んあああああ！」

そのたびにシーリスの中に快感の波が押し寄せ、
抗いがたい絶頂の震えによがり狂う。

「すごい・・・すごい・・・もっと・・・もっとお」

監獄
SAMPLE

続きは製品版にて
お楽しみください！



ひたすら犯され又寸を搾り取られる女達！

イカされるためだけに生かされるメス牛！

基本30枚、差分70枚、テキスト30000文字

200Pオーバー陵辱の監獄を堪能せよ！